

地域と作る演劇と日本語教育 2015

—新たな評価の視点から—

Gehrtz 三隅友子 (徳島大学)
misumi@tokushima-u. ac. jp

【要約】

本稿は、徳島県美馬市との連携により市の文化財「脇町劇場オデオン座」にて実施した「まほろば国際プロジェクト」(2007年から2015年まで6年間の取り組み)を総括し、参加者(日本語学習者と日本語教育を学ぶ日本人学生)のコメントをもとに日本語教育と演劇活動の関わりを新たな評価の視点から考察する。従来の評価領域の言語、文化に加えてグローバル社会領域を設定し、そこに「わかる」「できる」から「つながる」という学習行動目標を加え、この複合的な指標をもとに演劇型プロジェクトワークの意義を考える。

1. はじめに

筆者は「まほろば国際プロジェクト」(資料)を通して、地域(徳島県美馬市:徳島より西へ33km、JR普通列車にて約1時間のところ)における演劇を含んだパフォーマンス活動と日本語教育に関しての考察をこれまでも行ってきた。そして①日本語教育と演劇的知の理解と活用②多文化共生への働きかけ③コミュニティデザイナーとしての日本語教師の役割についての三つを課題として研究を行っている¹。本稿は2014年度にこのプロジェクトに参加した留学生4名と日本人学生8名(いずれも「日本語教育方法論Ⅱ」受講者)の最終レポート²をもとに、新たな「外国語学習の目的と評価」の観点から演劇活動と日本語学習の関連を考えるものである。

2. オデオン座の魅力

筆者は2000年徳島大学に赴任し、その数年後に徳島県内を観光して立ち寄った町、うだつの町並みの川向いにオデオン座(昭和8年に建設)はあった。素朴な外観に別段深い感動はなかった。しかし中に入って驚いた。板張りの床、舞台、花道そして木の手すりの着いた二階席、薄暗い中に赤と黄の提灯がぶらさがり、実際には見たことのない世界が現実にあった。使われてはいないが奈落も見学して、この異空間にすっかり惚れ込んでしまった。舞台と客席の近さも絶妙で、ここで何かをしたいそう演劇、お芝居をしたいという気持ちになった。この思いを持ちつつ実現には時間がかかった。

日本語を留学生らに教えたコミュニケーション教育を専門とする私は、2004年メディア教育開発センター(2009年3月廃止)にて、竹内敏晴レッスンと野口三千三体操を基本とした演劇的手法を体験する研修(「教育的コミュニケーションの基礎-身体関係からのアプローチ-」)を受ける機会を得た。その研修の最後の課題は受講者全員で宮沢賢治の「鹿踊り(ししおどり)のはじまり」を芝居として作り上げるというものであった。教育的コミュニケーションとは教育の中に身体的コミュニケーション

ンを取り入れて、教師と学生が双方向に学ぶ雰囲気を生み出し、聴きあって、最後に動かしていくというものである。研修後、この学びの体験を各教師が自らの教育実践に活かしていくことが期待されている研修でもあった。

そうして2006年にこの研修をまさに徳島大学にて実施する機会を得て、研修講師（身体的コミュニケーション及び演劇の指導者）と主催者（当時メディア教育開発センター山地弘起准教授）に東京から来ていただいた。そして2日間にわたって学生や地域の人たち20名が最終課題として演劇を行う、全員が身体と声を使う熱い研修を行うことができた。この時、演出家でもある講師、瀬戸口充氏があのオデオン座を見て専門家としてきっと何かを感じるだろう思い、その感想が聞きたくなかったのである。脇町へと向かい、「ここで芝居したくない？」の問いかけの答えは「ぜひ！」であった。こうして、生まれたのが「まほろば国際プロジェクトⅠⅡⅢ」である。

3. まほろば国際プロジェクトⅠⅡⅢ

その後「地域とつながる日本語教育」の活動として2007年から2009年の3年間「まほろば国際プロジェクトⅠⅡⅢ」（中島記念国際交流財団助成留学生交流事業）を実施することとなった。このプロジェクトは大学から地域へ学習の場を広げ、美馬市が所有する文化財「脇町劇場オデオン座」を舞台に、まさに留学生や日本人学生、地域住民らによる演劇活動である。さらにこの活動で、留学生が日本人と協力して演劇をする過程で①日本語のやりとり、ことば以外の身体を使ったコミュニケーションの大切さについて学ぶこと、②演じる者と観る者が一つの空間で作品を共有するという演劇を通じた国際交流の場（日本人にとっては多文化共生の疑似体験の場）が実現できると考えた。また「まほろば」の名称は美馬市が掲げる「四国のまほろば美馬市-だれもが住みたくなるまちをめざして-（すなわち外からの日本人・外国人を問わない住民を積極的に受け入れることを勧め、新たな住民とともに地域を活性化していくことを目指す）」から借用して「まほろば国際プロジェクト」と名付けた。

プロジェクトの内容は年によって少し違いはあったが、おおむねはまず7月に留学生が小中学校を訪問し国紹介と交流会さらにホームステイを体験する。10-11月に開催された国民文化祭や美馬市の教育振興大会等に参加し交流の基盤を作る。そして12-1月にオデオン座にて留学生による国紹介、演劇と交流会という一連の活動であった。3年の演劇は前述の演出家によって次の三つが選ばれ上演にいたった。

2007年度：「どんぐりと山猫（宮澤賢治）」不思議な世界へ巻き込まれる主人公の一郎を5人の留学生（メキシコ・南アフリカ・ペルー・ドイツ）が場面ごとにリレー形式で演じた。どんぐりたちは地域の演劇クラブの人たちにお願ひした。

2008年度：「島ひきおに（山下明生）」では、人間と遊びたいが鬼ゆえに誰からも疎まれ相手にされず、寂しさのあまり島を引っ張り歩き続ける一匹の鬼を9人の留学生（ラトビア・セルビア・ケニア・イエメン・インドネシア・カンボジア・アフガニスタン・メキシコ・ドイツ）が民族衣装に身を包み演じた。鬼の姿をしているがために人間から疎外される立場は「姿形（すがたかたち）が異なる」という目で見られがちな日本社会における外国人のそれと重ね合わせた人も多かった。語りの部分を地域の小学生にお願ひした。

2009年度：「狼森と笹森、盗森（宮澤賢治）」では、土地を切り拓いて生き抜く農民と話の語りを留学生9人（中国・韓国・日本）担当した。これも地域の人や市の職員11人（中国・オランダ・ドイツを含む）らにも一緒に演じてもらった。農業を通じた人と自然との対話が世界共通であることを

確認できたようである。

このプロジェクトの特徴は、演出家の力を借りて①劇場（空間）を交流の場あるいは出会いの場とすること②日本人と日本語学習者（外国人）が協同して演劇を作ること③演劇活動を在住外国人と観客の日本人がともに楽しむことの三つが挙げられる。

当初は留学生が地元の日本人と協力することから始め、3年目には地域在住の外国人（オランダと中国からの美馬市国際交流員）の参加も得られた。さらに観客として地域で働く外国人（ベトナム人及び中国人研修生）も含めて、地域ぐるみの交流をする機会となった。留学生が日本語を学び、学んだ日本語を使う事によって、地域の人たちと交流できること、さらに演劇を通して、そのメッセージを共有するという活動が「共生社会」の第一歩となると実感できた。このような対話通してこれからの「共生」のあり方を考えることにつながっていった。

4. 異文化キャラバン隊によるまほろば国際プロジェクト 2013-2015

4-1. 概要

しばらくの休眠期間のあと、これまでの成果をもとに、文部科学省留学生交流拠点整備事業の委託を受け「とくしま異文化キャラバン隊」による新たな「まほろば国際プロジェクト」の実施にこぎつけた。これまでに培った留学生と地域住民の協働による演劇活動を日本語教育の実践の場として、「多文化共生のまちづくり」の視点からこのプロジェクトを発展させ実施したいと考え開始した。

2013年度：スタートがやや遅れ、2月に美馬市穴吹小学校にて国紹介、一般の家庭にてホームビジットそして演劇と交流会を実施した。

2014年度：7月に美馬市岩倉及び喜来小学校を訪問し国紹介と交流会、11月には三島小学校の「ふれあい交流収穫祭（児童が地域の人たちと収穫を祝い交流すること目的とする行事）」に参加、児童らの家庭にホームビジットの準備を経て、1月にホームビジットと国紹介、演劇、交流会と1年をとおしての活動となった。この年より特に美馬市の協力を得て、オデオン座にて三島小学校6年生の英語劇「おむすびころりん」が演じられたことが交流活動を確実なものにできた。

2015年度：再び11月に三島小学校の「ふれあい交流収穫祭」に参加後、ホームビジットの実施。12月にオデオン座にて、国紹介・三島小児童による和太鼓演奏・「島ひきおに」の上演・参加者全員による交流会を行うことができた。（参加者の詳細は資料1参照のこと）

4-2. 関わる者の気づきと変化

前期のプロジェクトに引き続いて、学びの場を大学から地域へ移すためには、市長をはじめとして様々な組織や団体の協力が大切なポイントであった。また今期からは、演劇指導を四国学院大学（香川県善通寺市にあり、美馬市まで車で1時間の距離）仙石桂子講師（身体表現と舞台芸術マネジメント）と演劇を学ぶ学生たちの支援を得て、徳島大学の学生と演劇を専門とする学生らの演劇を通じた出会いと学びの場にもなった。

さらに多くの学校（小学校・中学校・高校）訪問そしてホームビジット・ステイでたくさんの家庭にもお世話になった。学校訪問では児童・生徒の多文化への気づきと同時に一緒に企画運営をする教職員ら自身の異文化に対する気づきがあったことを聞いた。ホストファミリーのアンケートからは、留学生との親密な交流を通して自らのステレオタイプや偏見への気づきについてのコメントを得られている。宿泊先の施設においても、お風呂の入り方、宗教等による食事制限への対応が当初問題になった。その翌年からは、外国人学生へ情報（使い方等）を伝え、それが実際にできるのかを日本人学

生がモデルとなって教えることを徹底した。料理に関しては施設側がイスラムや菜食主義者のための料理を着実に対応してくれるようになったことも事実である。留学生も受け入れ側も少しずつ互いが歩み寄っていることが感じられる。

また三島小学校のふれあい収穫祭にて、近くの介護施設の職員の方々に一緒に働くインドネシア人の介護士に対しての好意的な感想を聞くことができた。技能実習生に加えてこの地域にもまた働く新たな外国人が増えていること、そして協労の必要性も実感した。

4-3. 「島ひきおに」をめぐる

プロジェクトの締めくくりである演劇に、この3年間は「島ひきおに」を選んだのは理由がある。人権教育の題材としても取り上げられるこの話は、前述のように、「鬼は怖い、恐ろしいもの」としか考えられない人間にとって、いくら鬼が「おーいこっちゃきてあそんでいけ！」と呼びかけても友達にはなれない。人間からひどい仕打ちにあっても、どこかに鬼を受け入れてくれるところがあると信じてずっと歩き続けている。この話の持つテーマは、留学生、日本人学生、また劇を見る人に対して、人種や肌の色、文化や価値観が違うという理由で交流を避けてしまうことへの問題提起であり、人との関係性を考えるきっかけとなってほしいというものである。

まず国紹介によって様々な国を知ること、その国からの留学生が習い始めの日本語で一生懸命に自分の国を語る姿を見る。これによって、日本に住む自分と広い世界の様々な人たちと文化の存在を知ってもらおう。これはインターネットからは得られない生の情報であろう。そして演劇を見てそのメッセージを受け止め、この話の鬼でも人間でもない第三者の立場でそれぞれの気持ちを感じて、考える。さらに参加者全員が一つの輪になるゲームから、最後に自由に話す（勇気を出して自分から働きかけて）という体験をする。すなわち参加者全員に多文化とは何か、共生に向けてできることを考えるまずは第一歩としてこのプロジェクトを位置づけている。

最終年度の2015年12月の公演では、美馬市の小学生に「島ひきおに」の続きを考えてもらい、いくつかの結末を披露した。それらは、船乗りと仲良くなって暮らす、鬼の島を見つけてそこで結婚して幸せになる、鬼と一緒に暮らしたいという人が現れる、そして最後には一人の女の子が登場するというものである。この女の子は鬼のことを「怖くない」と言い、「これまで本当にさびしかったんだね」と鬼の気持ちを理解し、「私が友達になってあげる」と手を差し伸べる場面で幕を閉じた。

5. 日本語教育の視点から

5-1. 参加者の評価

2014年度（2015年1月演劇活動実施）の参加者38名のうち、「日本語教育方法論Ⅱ」の受講者に学生への成績評価後の2月初めに「まほろば国際プロジェクト（プロジェクトワーク）を評価する」というレポートを課した。受講者14名中12名の提出があった（内訳は留学生4名・日本人8名である）。授業では、演劇練習とプロジェクトワークについての概要さらに言語学習における評価についての説明は行っていた。課題のテーマは、留学生（日本語学習者）には、①プロジェ

表1 総合的コミュニケーション能力 3×3 +3			
領域/能力	わかる	できる	つながる
言語	自他の言語がわかる	対象言語が運用できる	対象言語を使って他者とつながる
文化	自他の文化がわかる	多様な文化を運用できる	多様な文化的背景をもつ人とつながる
グローバル社会	グローバル社会の特徴や課題がわかる	21世紀型スキルを運用できる	グローバル社会とつながる
国・言語・文化 学習スタイル			異文化理解 教育資料の活用
			教育界の人・モノ・情報

クトワーク（演劇を最終プロダクトとする）に参加して教育・学習方法としての感想 ②活動を通し

てどのような能力が以前よりも高まったと思うか、何も変化がないと思うか（能力に関しては、表の9項目と下の三つを参考にすること）について、日本人（日本語あるいは英語教員志望者）には①日本語教育あるいは言語教育の方法として、一緒に活動した留学生（演劇に参加した学生は他に初級の6名がいる）を観察し彼女・彼らの能力の向上に寄与があったかどうか、実際のエピソードを加えて記述すること②そして自分にとってこの活動はどうであったかも書く、であった。

5-2. 留学生

4名の記述内容を表2に要約した。彼女たちの共通点は教育活動の中でも生活の中でも「演劇」を経験したことがなかいと述べていることである。最初の戸惑いと壁を越える難しさを感じたが、みんなで協力することによってようやくこなせてそして達成感が得られたとしている。「言語・文化領域」のわかる・できる・つながる能力の向上はおおむね感じられたようである。そして「グローバル社会」に関しては、学生Cの「日本と中国」以外の国に対しての関心があったことから、この領域に対しての評価が高かった。4名ともこの活動がグローバル社会領域にまで及んでいることに気づき、その中でもそれぞれが「コミュニケーション能力」「協力関係の構築」「偏見を生む心の問題」「何のために学ぶのか」をそれぞれの日本語学習の目標としていることが読み取れた。

表2 「留学生の評価」

学習者		日本語	内容の概略
A	中国 F	N1 以上	<ul style="list-style-type: none"> ・ 演劇を通して日本語を学ぶのは初めての体験 ・ 創造的な教育の方法⇒セリフを覚えて演じると記憶に残る・辞書でなく周りが詳しく説明してくれる（翻訳でなく言語での言い換えの方がよい） ・ 日本人と日本語で話す機会が多かった ⇒言語のわかる・できる・つながるはOK/文化の三つはまあまあできた/ グローバル社会の三つもできたように思う ・ 積極的に「言語」「文化」「グローバル社会」の領域の能力とこのプロジェクトのつながりが感じられた。コミュニケーション能力が総合的なものであることもわかった。
B	中国 F	N1 以上	<ul style="list-style-type: none"> ・ 一生の思い出となった。（演劇は初体験） ・ 日本文化の理解という点で一番能力向上があったと思う。 ⇒これまでの学習経験から「演劇」が教育につながるとは考えず、メンバーたちがまじめに取り組む姿、また専門家や演劇を学ぶ人たちの存在も驚いた。机に向かって講義を真面目に聞くという中国と違って日本人学生の日常生活は豊富だ。 演劇は生活そのものを変えられないが、自分を変えることができる。 ・ 他の初級の学生を見て、演じることによって言語はそれほど必要でなく、非言語も重要なことがわかった。好奇心（知りたい、話したい）という気持ちも大切だ。
C	中国 F	N1 以上	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業で演劇をするとは思わなかった。この方法は良い点も悪い点もある。 ・ <言語>「島ひきおに」は昔の日本語と方言が入っていた、説明を聞いてホテルの中でそのフレーズを使ってみたりして使い方がしっかりわかった。 ⇒詳しい説明と理解が必要 ・ <文化>「島ひきおに」のメッセージから日本社会の「偏見」とは何かを考えた。 ・ <グローバル社会>一緒に活動することによって様々な国の人と交流ができた。 演劇のメッセージをもっと強く打ち出した方がよい。改善点はたくさんある。
D	スウェーデン F	N3 程度	<p>（英語による記述：日本語訳による抜粋）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ おもしろくかつ学びのあるものだった。よい経験だった。着物の衣装が嬉しかった。 ・ 最初何をどのようにすべきかわからず混乱した。演劇は初めてで、自分の役が簡単に練習すればするほど、自分が開いてきて、外とのつながりを強く感じられた。 ・ 劇場もすばらしく、古い日本を感じることができた。 ・ 教室で座っているだけでは学べない、人とのやり取りの中で学ぶ方法はほかにはない。

		・知識で学ぶ以上に、いろいろな文化に触れることが大切、経験していろいろな価値観を身につけることが大切、そして互いに合わせて歩み寄ることが大事だと思った。
--	--	--

5-3. 日本人学生

日本人学生8名の記述を表3にまとめた。

表3「日本人学生の評価」

学生 学年	エピソード	全体感想
① 2年 F	「石を積み上げる」「綱を引っ張る」「わくわくして期待する」等の言葉が身体を使って表現できるようになっていった。一つの劇を作るという目標の中で自然な会話ができた。	・共通の話題がある ・友だち関係が作れた
② 2年 F	ルーター役の上級学習者と不自然に聞こえるイントネーションについて練習ができた。バスの中で英語話者に英語の宿題を見てもらえた。	・学習者にとって収穫のある活動 ・劇という一つの目的に努力ができた
③ 2年 F	大声で第二言語を話すことは留学生に自信がつく場となる。演技力、発声、立ち回りといった非言語を駆使する。劇を作るという連帯感が生まれる。宿泊も重要（食べる・お風呂に入る・寝る）	・演劇をしたことのない者が一緒に努力するという点がよかった。 ・貴重な体験。
④ 3年 M	教室内のインプット・アウトプットではなく、既習の内容を応用させるという刺激的な方法。英語の使えない自分と初級の日本語学習者との宿泊先でのやりとりは、彼らの学習意欲を高めることができた。	・留学生らの質問に答えられない自分やなぜなのかを問うきっかけにもなった。
⑤ 4年 F	鬼役の初級学生の上達度に驚いた。セリフを覚える、言い返し、心情の変化、表情ができるようになっていた、演出家の話す日本語がわかって動きが変わっていったのが本当に理解することだ。日本のマナーに対しての注意を受け入れている学習者の姿を見た。	・留学生の成長を見た、留学生と寝食を共にして同じ舞台に立ったことにて感銘を受けた。 ・座学とは違う効果と教師の役割
⑥ 4年 F	活動を体験したことが留学生の日本語学習に好影響を与えた。演劇に参加するにつれて一人の学習者の違った面を見られたり、声掛けができたりして「つながる」実感を持てた。	・演劇は苦手、自由なら参加しなかっただろうが、意義があった。 ・留学生の姿が私の背中を押してくれた。
⑦ 4年 M	日本語能力の向上や学習へのよりよい取り組み方への寄与があった。台本を演じられるように学ぶことがタスク活動であることを理解した。ある「日本人のように話したい」が「日本語で何かをしたい」の意識に変わっていた。この活動の役割かもしれない。	・英語教師を目指す自分にとって実践的な内容であった。 ・教室外の活動の組み立ても学んだ。
⑧ 4年 M	上級の学習者も方言や感情を込めるといった学びになっていた。初級者には、最初内容も方法も理解が遅く難しかったようだ。終わってから説明を聞いて意味が分かったことを聞いた。完璧にわかってからでなく、やりながらわかるという逆の発想もある。	・英語教師として演劇体験は必要。 ・クラス運営に教師のパフォーマンス能力も大切なことを感じた。

記述からは、言語・文化・グローバル社会の領域の「わかる・できる・つながる」にそれぞれコメントがあったが、一つの目標のもとに期限付きかつ短時間で達成しなければならなかったことから、「わかる」「できる」以上により強く「つながる」必要性を感じて行動がされていたようである。それは劇場以外の移動中のバスの中や宿泊先でも互いに練習し合っていたことや、学生①が他の「文化交流」活動では自己紹介をしてテーマについて話すだけで盛り上がらない体験をしていたのと比べるとここでは必要に強いられて「つながる」実感が湧いたことがわかった。留学生らが日本語を学習する意義や動機づけにも大きな役割を果たしていたとしている。英語教員志望の二人からは、教師としての役割に対して考えたことが書かれていた。プロジェクトワークの教師が場を設定して効果を信じて見守り続ける必要があることや、自身が学生をコントロール（クラス運営等の意味）するために「演じる能力」も要するというものであった。

5-4. 外国語学習のめやす -新たな評価-

プロジェクトワーク型の教育活動を実施してきて、常に考えてきたのはこの活動の意義と効果であ

った。大学の授業の中で実施するためには、授業の前と後で何がわかり、何ができるようになったのかという変化を学習者と教師が両方で確認できることが必要である。ここでは「わかる」「できる」に焦点が当てられている。がしかし教師が学習者を評価して成績を出すという最小限の評価（大学の成績評価はここで終わることが多い）に加えて、学習者自身の自己評価（自分にとっての学びの意義を確認すること）さらに、関わった人がそれぞれの立場で自己評価と他者評価を行うことがプロジェクトワークでは必要とされている。プロダクツ（演劇と国紹介）の評価から次回のプロジェクトを改善に導くという循環型の評価でもある。

これまでにプロジェクトワークの目指すもの³として①日本語習得によって何を成し遂げたいのかを問いかける「対話」型の学習方法であること②文法積み上げ型の学習と組み合わせると効果を増すこと③プロセス（過程）とプロダクツ（成果物）のどちらも重視すること④「言語教育は生きることを支える教育である」に従って、学習者の必要に応じて働きかけること⑤日本語を使って日常生活を体験することの五つを挙げ、これらを従来型の日本語教育との違いを考察してきた。教育の実施者（教師・教育行政担当者）にも学習者にもより明確な形で提示することはできていなかった。このように新たな目的と評価を模索していたときに、国際文化フォーラムの提唱する「外国語学習のめやす」の「教育理念：他者の発見・自己の発見・つながりの実現」と「教育目標：ことばと文化を学ぶことを通して、学習者の人間的成長を促し、21世紀に生きる力を育てる」に出会い、さらに表1の「学習目標：総合的コミュニケーション能力の獲得」こそが、この「まほろば国際プロジェクト」の評価の柱として活用できると考えたのである。従来型の注入主義の教育では、言語・文化の2領域に「わかる」「できる」の2能力の目標で事足りたが、グローバル社会という領域に「つながる」という能力が加わり、3領域×3能力+3連繋の視点からプロジェクトワーク型の活動を共有しさらに発展させることが可能になったと考える。表4は今回の学生のコメントをもとに新たに作成した評価指標である。

表4 まほろば国際プロジェクト 2015 オデオン座の活動
3領域×3能力+3連繋で見る

	わかる	できる	つながる
言語	「島ひきおに」/「上をむいて歩こう」: 語彙や表現を覚える・発音の練習をする	演出家の手助けを借りて演じる	・演劇活動を目指して、積極的に対話し交流する ・交流会で交流する
文化	作品の意味 メッセージの意味 役割の意味	・メッセージの意味を考え表現する ・それぞれの役割を演じる	演劇・国紹介・英語劇等の様々な発表活動を互いに楽しむ
グローバル社会	本プロジェクトでこの作品を自分たちが演じることの意味	日本人・留学生・小学生・四国学院大学の学生それぞれの役割を遂行する	・美馬市脇町劇場オデオン座で演じ、様々な人と交流する ・活動を振り返り、意義をさらに確認する(自己評価)



関心・意欲・態度/学習スタイル	<ul style="list-style-type: none"> ・演劇活動 歌とダンス ・バスによる1泊2日の研修旅行(美馬市)
既習内容・経験/他教科の内容とつながる	<ul style="list-style-type: none"> ・日本語学習 ・英語学習 ・演劇経験 ・外国人/日本人学生との交流
教室外の人・モノ・情報とつながる	<ul style="list-style-type: none"> ・小学生・教師・父兄 ・初級留学生 ・美馬市脇町劇場オデオン座 ・四国学院大学学生 ・美馬市穴吹温泉

6. むすびにかえて

6年間に渡る活動を経て、関わった人全ての感想を越えた一つの評価指標を提示することができた。これには、活動を継続する中で言語教育が目標とするものが社会状況とともに変化してきたこと、それに合わせたより具体的な評価の指標が考え出されたことに他ならない。2014年の参加者からの指標を使って、最終年度（2015年12月に実施）の活動を振り返ることを始めたい⁴。教師のねらいと学習者の気づきから得られたこの評価もまた項目の精査が行われると考える。

学習者のコメントからは、表の+「連繋」の上二つでは、「演劇」＝苦手あるいは経験がない、「演劇」＝学習方法ではなく表現方法であるという価値観が活動の前と後では変わったことが確認された。そして「教室の外の人・モノ・情報とつながる」では、オデオン座の魅力が挙げられよう。この劇場で、様々な人（子供から大人まで、他言語・多文化背景を持つ人たちが）、場の持つ力に包み込まれたようにパフォーマンスができたことを振り返る声もあった。ここでは練習の時とは違う身体を使って表現する、表現されたものをしっかり観る、そして自分と他者で何かを作り上げる力が必要となる。この場でこの力を使う体験をすること、この力に気づいて使える自分を経験することこそが、多文化とつきあっていくための基本的なコミュニケーションの力だと考える。興味深いのは、大学の教室で行われた国紹介と、小学校の体育館の舞台での和太鼓演奏と、大学内の舞台で演じられた「島ひきおに」とでは、演じる者の動きも気持ちも全く違ったことである。昭和期の地域文化を支えていたこの文化財を、これからも演じる者と観る者が一緒に活用し続けていくことを期待したい。うだつの町並みもオデオン座も住み慣れた日本人にとっては古びた取り柄のないものかもしれない。がこれまで活動した外国人にとっては、美しいそして温かいぬくもりが感じられる日本の一部であること、その心を持って年代をこの文化遺産を守り続けていきたいと考える。本活動はオデオン座との出会い無しには生まれることはなかっただろうから。

「まほろば国際プロジェクト」は平成25-27年度文部科学省留学生交流拠点整備事業「異文化キャラバン隊による国際化と新たな地域の創成-留学生との交流による多文化共生まちづくり-」における一つの活動として実施した。本プロジェクトに関わってくくださった全ての皆様に深くお礼申し上げます。

本事業のURL <http://www.isc.tokushima-u.ac.jp/caravan/>

参考文献

- Gehrtz 三隅友子 (2006) 「学生評価から教師の内省に向けて-教育コミュニケーションの基礎. 身体関係からのアプローチを受講して-」メディア教育開発センター NIME 研究報告第 20 号 pp.212-237.
- Gehrtz 三隅友子 (2011) 「地域と作る演劇と日本語教育-まほろば国際プロジェクト3年の活動を経て-」第 23 回日本語教育連絡会議報告発表論文集 pp.159-168.作成資料:「まほろば国際プロジェクトⅢ」DVD
- Gehrtz 三隅友子 (2015) 「異文化課キャラバン隊とアジアをひとまわりしよう-公開インタビュー-」渡部淳+獲得型教育研究会編,『教育プレゼンテーション』第 2 部 11, pp.81-85
- 国際文化フォーラム編 (2013)『外国語学習のめやす』2013 ココ出版
- 小林由利子他 (2010)「ドラマ教育入門」図書文化
- 斎藤孝 (2000)「身体感覚を取り戻す-腰・ハラ文化の再生-」NHK ブックス
- 佐々木倫子 (2006)『パラダイムシフト再考』「日本語教育の新たな文脈-学習環境、接触場面、コミュニケーションの多様性-」アルク
- 竹内敏晴 (1988)「ことばが劈かれるとき」ちくま文庫
- 竹内敏晴 (1989)「からだ・演劇・教育」岩波新書 67
- 竹内敏晴 (1990)「からだとことばのレッスン」講談社現代新書 1027
- 野口三千三 (1980)「野口体操・おもさに貞く」柏樹社
- 羽鳥操 (2008)「マッサージから始める野口体操」朝日新聞出版
- 平田オリザ (2001)「芸術立国論」集英社新書 0112
- 平田オリザ (2004)「演技と演出」講談社現代新書 1723
- 平田オリザ・北川達夫 (2008)「ニッポンには対話がない-学びとコミュニケーションの再生」三省堂
- 渡部淳 (2001)「教育における演劇知」柏書房
- 渡部淳 (2007)「教師-学びの演出家-」旬報社
- 渡部淳 (2007)「大学生のための知のスキル・表現のスキル」旬報社
- 渡部淳・ニューランズ (2009)「教育方法としてのドラマ」晩成社
- 吉田新一郎 (2006)「テストだけでは測れない!」生活人新書 176 NHK 出版
- 鷺田清一他編 (2007)「身体をめぐるレッスン 3」岩波書店
- J. ポリセンコ・伊東博訳 (1990)「からだに聞いてこころを調える」誠信書房
- L. クリステン・吉田新一郎訳 (2003)「ドラマ・スキル-生きる力を引き出す-」新評論

注

-
- ¹ Gehrtz 三隅友子 (2015)「地域と作る演劇と日本語教育 2014-プロジェクトワークの視点から-」第 19 回ヨーロッパ日本語教師学会大会報告書 pp.137-142
- ² 大学で設定している教師による学習者評価、すなわち成績判定後に作成を依頼し 12 名の提出があった。留学生 1 名と日本人学生 1 名からは提出がなかった。
- ³ Gehrtz 三隅友子 (2012)「プロジェクトワーク再考-新たな日本語教育の可能性-」第 24 回日本語教育連絡会議報告発表論文集 pp.99-108.
- ⁴ 2015 年 12 月末現在、翌年 1・2 月の間にこの指標をもとに。演出家と演劇専攻の学生らのコメントを含めて振り返りを予定している。特に演出家が留学生に演出する際の日本語が「わかる」ことそして望まれた演技が「できる」というようになるというコミュニケーションについての考察と、さらにカメラや音響に関わる演劇専攻学生の役割も分析対象としたい。

資料

まほろば国際プロジェクト 2007-2009 (I II III) / 2013-2015

2007年度

2008年1月27日 「どんぐりと山猫」・国紹介・交流会 /ホームステイ

留学生6名と地域住民33名による演劇 観客数147

2008年度

2008年12月23日 「島ひきおに」・国紹介・阿波踊り体操・交流会/ホームステイ

留学生9名と地域住民10名と日本人学生2名 観客数110

2009年度

2010年1月17日 「狼森と笹森、盗森」・サルサダンス・阿波踊り体操

留学生・日本人学生9名と地域住民11名による演劇 観客数163

2013年度

2014年 2月9日 美馬市内ホームビジット キャラバン隊7名

2月10日 舞台装飾ワークショップ(草月流) /穴吹小学校・脇町高校訪問

2月11日 演劇「島ひきおに」・国紹介・交流会

キャラバン隊:45名(エルサルバドル・ホンジュラス・ブラジル・インドネシア・アイルランド・ラオス・ポーランド2・スウェーデン2・中国5・日本人25) 観客数100

2014年度

2014年7月4日5日 ホームビジット・小学校訪問国紹介と交流会キャラバン隊4名

11月16日 三島小学校「ふれあい交流収穫祭」キャラバン隊7名

2015年1月23日 重清東小学校訪問 交流 /ホームステイ

24日 舞台装飾ワークショップ(草月流)

25日 演劇「島ひきおに」・国紹介・小学生の英語劇・交流会

キャラバン隊:38名(台湾8・モンゴル6・中国6・スウェーデン3・インド・イエメン・ケニア・クロアチア・日本11) 観客数150

2015年度

2015年11月15日 三島小学校「ふれあい交流収穫祭」に参加 /ホームビジット

12月12日 舞台装飾ワークショップ(草月流)

13日 演劇「島ひきおに」・国紹介・小学生の和太鼓演奏・交流会

キャラバン隊:39名(モンゴル・エジプト・メキシコ・インド・ラオス・フィリピン・台湾・ブルキナファソ・ブラジル・インドネシア2・マレーシア2・中国5・日本・21) 観客数100